



## 荻田 泰永さん

神奈川県出身、41歳。  
北極を歩くまでアウトドア経験はほとんどなく、初めての海外が北極だったという少し変わった冒険家。2001年より毎年のように北極を訪れ、1人で徒歩での冒険を行ってきた。これまでに北極点無補給単独徒歩に2度挑戦。2018年1月には無補給、単独徒歩で南極点へ到達。日本人初の偉業を果たし、植村直己冒険賞を受賞した。北極や南極では研究機関や大学から依頼された環境変化の調査研究にも協力。歩くスキーで徒歩する泰永さんの採取データは貴重な資料になるといふ。日本国内でも、小学生と一緒に100キロ以上歩き旅をするなどの活動をしている。2008年に鷹栖町へ移住。妻の佐知さん、長男の景人くん、3人家族。



(写真提供/荻田泰永さん)

## \*佐知さんが息子と2人で暮らす理由

佐知さんはよく「旦那さんは不在がちで実家も遠い。鷹栖で幼い子どもを連れて、ほとんど2人で、なぜ暮らしているの？」と聞かれるそう。考えてみれば出身地の高知を選ぶこともできたはず。理由のひとつは「人」。大きいのは前述の高野夫妻の存在だ。歳は離れてはいるが、家のリフォームを手伝ってもらったり、薪ストーブ用の薪を運んで来てくれたり。水道管が凍結したときなどはすぐに駆け付けてくれたそう。高野さんとは、親子のような友人関係なのだろう。

色濃く感じられる四季も住み続ける理由のひとつだという。春には庭のイタヤカエデの樹液を採つ

て煮詰めてメイプルシロップにしたり、夏には畑で野菜を育てたり、山登りを楽しんだり。秋は黄金色の水田と大雪山系を眺め、冬は薪ストーブの暖かさを感じつつも、外では雪山で遊ぶなど、暮らしを存分に楽しんでいる。

景人くんは2歳半から町営のバスで保育園に登園。佐知さんは日中、町の臨時職員として働いている。旭川までは車で30分ほど、空港には45分で着く。買い物にも不便はない。自宅は古い小学校の教員住宅を改修して使っていて、グラウンドは広い庭のようなもの。人と自然と程良い距離感。ここには東京にはないものが一式揃っているのだ。



写真上は佐知さんの趣味の水彩画。1歳になった頃の景人くんを描いている。

## なぜ冒険家の荻田泰永さんは鷹栖町に拠点を設けているのか？

北極や南極を1人で歩き、ニュースにも取り上げられる冒険家が鷹栖町に住んでいる理由とは。

## \*冒険家が鷹栖に住み着いた理由

最初に鷹栖へやって来たのは妻の佐知さん。高知県出身の佐知さんは「北国の田舎暮らしがしてみたい」と東京から北海道へ。そのとき頼ったのが知人の高野夫妻だった。鷹栖町で馬小屋を改築して暮らしており、あちこちから集まってくる佐知さんのような移住希望者にとつての玄関口のような2人。佐知さんは当初移住をする気はなかったが、薪ストーブを使う雪国の暮らしや、鷹栖の人のウエルカムな雰囲気馴染んで住み始めることに。東京時代からの恋人だった泰永さんも遊びに来て

いるうちに気に入って、2008年に移住を果たした。当時の泰永さんは8回目の北極で1000キロの単独徒歩行にチャレンジし、中間地点で火傷を負って断念していた。挫折感を味わった泰永さんは、鷹栖の人々の温かさに移住を後押しされたのかもしれない。冒険期間はもちろん、準備、スポンサー訪問、小学生との歩き旅、講演などで忙しく、泰永さんが鷹栖にいられる日数は1カ月に2〜4日程度と限られている。それでもこの10年間、帰る場所は常に鷹栖であり続けた。



## \*北成地区に住み続ける理由

荻田家のある地域は北成地区と呼ばれ、住民の多くが農家。小高い丘の上であり、晴れた日に見える旭岳や十勝岳連峰と、水が入ってキラキラと光る水田のコンビネーションは心洗われる風景だ。それでもきれいな景色ばかりではない。農村地域なりの課題がある。農業人口の高齢化に伴う離農者の増加、空き家の管理は鷹栖町の大きな課題であるが、荻田夫妻はこの地の魅力を見出している。「何も無い」が東京にはない。このまま何も作らずに空を見上げて天の川を見てもいい」と泰永さん。可

能性を感じるのには自宅のすぐそばの旧北成小学校。リフォームを行えば、たとえば東京からの旅行者をもてなすことができるかもしれない。東京と旭川は飛行機で2時間にもかかわらず、1泊2日や日帰りもできてしまう。本州の田舎よりも近い、本町の田舎を感じてもらえたら…。  
10年住み続けると、良いところだけではない一面が多少なりとも見えてくるものだろう。それでもこの地に魅力を感じ、愛して住み続けていることが荻田夫妻から伝わってきた。